

〔萬寶鄙事記<sup>火三</sup>〕灰を末しふるひて、石灰の末を水にかきませ、炭の粉に和して丸じ、干てたけば終日きえず、又炭の末を蜀葵<sup>わらうすけ</sup>の生葉につぎ合せ、石灰のこき汁にてつぎ合せ、日に干て用れば、火久く滅す。

〔日本書紀<sup>神武三</sup>〕戊午年九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巔、瞻望域中、時國見岳上則有八十梟帥<sup>梟帥</sup>。

此云多  
稽屨又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置赫炭<sup>略</sup>。

〔屠龍工隨筆〕炭は夏買置こそ便なれとて、多く買てつみ置あり、然て淮南子に夏は炭の目重しと出たり、炭は秤ふつて直を定るものなるに、目の重きをもしらすして、多く買て所せげにつみ置こそおかしけれ。

〔都氏文集<sup>賦三</sup>〕生炭賦<sup>以待吹生烟爲韻、依次用之、百五十字以上成之、始申四點、限酉二刻、</sup>

物不獨化、時或有待、何爐炭之致功、亦人力之所在、觀夫歲陰推移、風雪相隨、見彼凜烈之在候、受此煦嫗之不訾、赴人之急、還疑行義之篤厚、入時之用、更似仁者之施爲、干以就之、作暖氣以養獸、干以近之、樂炙手之不龜、既而猛熾時至、辨士之舌同色、鼓動無已、美人之口交吹、爾乃漏入五更、無屬初明、既達旦而不死、復徹夜元長生、遂則保之以相傳、護之而不眠、誰謂之微扇、令作氣、我與元進、眇以起烟、於戲物既有此、人亦宜然、增元榮觀、資友好之煎沸、倍以價數、賴師匠之雕鏤、未能乞火、以自喻、唯願苦節以先天。

〔後拾遺和歌集<sup>二十</sup>〕誹諧歌人のすみたてまつらむいかゞといひたりければよめる。

よみひとしらす

心ざし大原山のすみならばおもひをそへておこすばかりぞ

〔散木弃詞集<sup>四</sup>〕冬さえてたへがたかりける朝に、伯のもとに、あはぢのすみ尋ましたりければ、をくるとて、